



Kobe Shoin Women's University Repository

Title	ホセ・リサルと日本文学 Jose Rizal and Japanese Literature
Author(s)	木村 毅 (Ki Kimura)
Citation	研究紀要 (SHOIN REVIEW), 第 8 号 : 1-25
Issue Date	1966
Resource Type	Bulletin Paper / 紀要論文
Resource Version	
URL	
Right	
Additional Information	

ホセ・リサルと日本文学

木村 毅

小 引

さきほどフィリッピンからマルコス大統領がわが国に來訪し、日比關係に新しい機運がうごかうとするのをみて、この旧稿のあるの思い出し、学界の一粟に供する。

ホセ・リサル (Jose Rizal, 1891—1896) は、フィリッピンではもっぱら国民的英雄 (National Hero) とよばれて、全国民の尊崇の依りとなつてゐること、日本に例を求めるとちょうど明治時代における明治天皇のようである。

彼は七千二百の島の島々からなり、七種の異なつた言語をはなして、乱離不統一のフィリッピン住民をうって一丸として国民に結成することを考へた遠識の士で、その意味からすると、国民的英雄より国祖の名がふさわしい。

本職は医者で、専門の眼科ではヨーロッパまで名声がきこえていた。そして、自国の獨立を念願した革命家であつた点では孫逸仙に似てゐる。

しかし、その才能を大いに文学に發揮し、「ノリメ・タンヘレ」と「フィリブステリスモ」の二大小説により、アメリカの批評家は南海のトルストイといつてゐる。詩人としてもあの国最大唯一の地位を占め、それで医者であるのは、森鷗外のようなものである。

彼はまた、歴史をもたぬフィリッピン人のため、自国の歴史を開拓創始した。マニラの図書館には、世界の史祖はヘロドタス、東洋の史祖は孔子、そしてフィリッピンの史祖はリサルといつて、この三人の肖像がならべて掲げてある。

その他に農耕や漁業も専門家。言語は二十一か国語に通曉して、日本語まではなし、フェンシングの名手で同国無比の決闘家といわれ、日本の柔術も習得して、ロンドンで仲間におしえていたこともある。すぐれた画家で、蠟細工（ロンドンのタッソー博物館のような）でも専門家の力備があった。いわば万能の天才型で、これを東南アジアのレオナルド・ダ・ヴィンチといってもおかしくないであろう。

フィリッピン人が彼を尊崇するのも、あたりまえで、わが皇太子御夫妻渡比のおりも、まずリサール像の前に花輪をささげられた。一九六一年は、そのリサールの生誕百年にあたり、あの国独立後ほじめての大祭典がおこなわれ、また世界の国々からリサールの研究家を招いて、五日間の *International Congress* をひらいて、彼の功業をたたえ、討論した。日本代表としては、戦時中、銃殺命令の下っているロハス（のちに初代大統領となる）を、独断をもって隠して助命して、フィリッピン国から恩人と仰がれている神保信彦元大佐と、私とが代表として選ばれ、*The National Guest of The Philippine Republic* として出席した。いまひとり早稲田の柳田泉教授が選に加わったが、健康の故をもって辞退した。

これはその国際会議のときに英語で発表した私のページアの元の草稿である。わが国はいま比較文学の研究が盛んだが、南洋文学と日本文学の交流を取り上げるのは、これが最初なので、活字にしておくことも、多少の意味があるであろう。

1 ふたりの日本人

ホセ・リサール博士が日本に旅寓したのはわずかに一ヶ月半にすぎなかった。（明治二十二年二月二十九日——四月一日）しかし、その短期な滞在が、彼の三十五年の生涯の伝記のなかに、最も光彩あるページとなって、永遠にフィリッピン人の注目をあつめることになったのは、われわれ日本人の大きな喜びであり、また誇りである。

このとき日本はリサル博士にふたりの友達を提供したのだ。それがどんなによき友達であったかは、現にフィリピンの研究家自身がこうかいている。

「フィリッピン人は、まさに少くとも二人の日本人にたいして、一種感謝の気もちを抱かざるを得ない。それは有能な文筆家末広鉄腸と、愛すべきサムライの娘おせいさんの二人である。この二人は、いずれも、それぞれの仕方によって、リサールの心を慰めてくれた。しかもリサルが最もそれを必要とした時において。この二人の友愛の情は、リサルにたいして、彼がになつていた重い荷物を、更ににないつづけてゆくための勇気と忍耐とを与えた。この二人がリサルに示した親切と、理解と、愛の心は、リサルが死刑の日に至るまで守りつづけたにちがいない大きなある物であつたろう。なぜならリサルは、その処刑をうける数日前、サンチャゴ要塞の獄房の静かな孤独のなかでさえ、その日本滞在の記憶すべき幾日と、おせいさんと過ごした幸福な時々とを、確かに思い起こさざるを得なかつたであらうからである」(「日本におけるリサル」八一―二頁)

じつはこの「おせいさん」については、日本人はこれまで全く何も知らないでいたのだ。たまたま戦時中、私が新聞記者としてマニラにわたり、国立図書館で Carlos Quirino 教授の “The Great Malayan” という伝記をよんで、彼女の写真および引用してあるリサールの日記書翰をみておどろき、ただちに新聞社に電報をうって、この女性に心あたりの人があるなら、知らしてもらいたいと言った。それは全日本に読者を有する毎日新聞だったので、方々から幾人かの女性の名のり出たり、また知らせがあった。中には私が、これかと思つて、著書にそう書いたものもある。

実のおせいさん自身もその記事をよんだ。娘夫妻が

「これはお母さん、あなたのことではないのですか」とたずねたら、

「そうだが、何も言わないでほしい。私は新聞やラジオでさわがれることなく、ただ、そっと世の中にかくれていたのだから」

と言ったという遺族の話である。

しかし、私に橋本求という友人があり、偶然にも「おせいさん」と非常に懇意な人で、それが

「あの人はまだ現存だが、内気な人だから、これ以上、いろいろと探索しないでほしい」

と言ったので、私はそれを承諾した。人のいやがるのをおかしてまで“Privacy”をかきみだすことは私のこのみに反する。

後でわかったことだが、そのころ「おせいさん」は私の家のある次ぎの街に住んでいたのである。散歩のおりなど、あるいは知らずして顔をあわせたことがあるかも知れないのだ。

私がおせいさんの探索をやめてから、早くも二十年の月日がたったが、去年（一九六〇）の秋 Philippine 大学の Josefa M. Saniel 教授の訪問をうけ、彼女の懇請によって橋本氏をたずねて おせいさんのことをきくと、すでに墓場の人であった。

それから今年になって、リサル百年記念準備会から Gregorio Zaide 教授がきて徹底的に調査をした結果が、Lanuza 氏と共著の“Rizal in Japan”という小冊子となった。いまのところ、この魅力ある「日本ムスメ」については、これに書かかれている以上の材料が出てくるあてがない。

いま一人の末広鉄腸！これはリサールが友人マリヤノ・ボンセにあてた手紙（一八八八、七月二十七日）のなかで
“I befriended a Japanese who was going to Europe after having been imprisoned as a radical and editor
of an independent newspaper. As the Japanese knew no other language but his own, I acted as his interpreter until our arrival in London.”

とかいているのがそれである。この鉄腸については、これは又、フィリッピンの方で、少しも研究の手がかりがないので、当惑していたようである。

現にリサールの最初の伝記の作者なる Austin Craig 博士は一九三七年に日本にきて、四月二十六日神戸で、ある日本人にこう語っている。

「リサールがアメリカゆきの船の中で知りあって、通訳をしてやった日本人を、年来しらべているが、どうしてもわからぬ」*

* これをきいたのは毛利八十太郎氏で、彼には次の二著がある。

(1) Jose Rizal, The Hero of Philippine (May. 1941)

(2) Complete Japanese Translation of “Noli Me Tangere” (Jan. 1942)

もし、クレীগ博士と吾々と出あう機会があったなら、そのとき吾々はただちに詳細な解答を与え得たであろう。なぜなれば、それが末広鉄腸であることは、早稲田大学の柳田泉教授によって確証され、完全に研究ができていたからである。*

* 柳田泉著『政治小説の研究』 vol. 2.

まず、末広の伝記をスケッチしておこう。彼はペリー提督のひきいるアメリカの黒船が日本の海を初めてたずねてきたより四年前の一八四九年二月、四国の宇和島にうまれた。ここの領主は伊達宗城といって、有名な賢明な進歩的な大名であつた。

鉄腸は十五才で領主のたてた学校に入ったが、そのころは全日本一般の風で、教える学問は中国近代の最大の学者である朱子の説が中心で、自由討究は一さいゆるさぬ。そのとき彼だけは、ひそかに王陽明の著書を愛読した。これは朱子説に對抗するもので、いわば反逆的思想で、これが明治維新の愛国的革命家をやしなつたのは著明な事実である。鉄腸はこういう異端の書物をよむので、教官から譴責をこうむつた。

まなぶこと六年、彼は教授にあげられたが、明治維新革命のあとで、一八七〇年東京に出、さらに京都にうつり、王陽明学者について、いよいよ研究を深めた。それから郷国にかえて役人となり、また東京に出て大蔵省に入ったが、折から日本にも新しいエポックが開ける活気がみちみちてきたので、窮屈な役人がおもしろくなく、思いきつて新聞界に身を投じた。

それは「曙新聞」^{あけぼの}について「朝野新聞」という、どちらも進歩的な新聞に入り、光焰万丈、奔放不羈の筆をふるうた。折から日本には自由民権運動といつて憲法を要求する国民的大運動がおこつた。末広はそれに参加し、激烈の主張をやめないので獄に投ぜられること二回におよんだが、そのために彼の評判はますます高くなつた。そのかたわら彼は「雪中梅」^{ゆきの中ばな}と「花間鶯」^{はなまにうぐいす}の二つの政治小説をあらわした。今日からみると、Benjamin Disraeliの作風をまねた粗朴幼稚なものだが、当時の日本人の要求に合致し、ともにベストセラーとなつた。それで不時の大収入を得たので、末広は一度、じかに西洋文明をみってくる必要を感じ、一八八八年四月、横浜からベルジック号という船にのつて、はからずも

サールと知りあったのである。

多くの日本人の通弊で、鉄腸も英語はよめたが会話はできない。リサールはならい立ての日本語で彼のために通訳してくれて、アメリカをへて、ロンドンまで一しょに旅行し、ロンドンでも度々会合している。

末広はこのあいだに、毎日筆をとって旅行記をかいた。

「啞の旅行」1889

「鴻雪録」1889

その間に日本では、鉄腸らの指導した議會開設運動が効を奏し、ヨーロッパとアメリカ以外では初めての憲法が極東の島国に発布され、明治二十二年に衆議院の選挙がおこなわれた。鉄腸はそれに立候補して、日本で（また東洋で）最初の代議士のひとりとなった。

それから数年間の政治活動の間に、彼は三つの小説をかいている。

「南洋の大波瀾」1891

「あらしのなぐり」

「大海原」1894

明治二五年に日本では第二回の総選挙がおこなわれたが、末広はこのとき不幸にも落選し、その機会にロシヤ領シベリヤから北部支那を旅行して、アシヤの形勢を視察した。翌明治二七年（一八九四）の総選挙において、再び議会の席を得、全院委員長の重要な椅子についたが、このころから健康がようやく衰えて、明治二十九年二月五日、サールの刑死に先んずること十ヶ月、四十八才の若さで歿した。病氣は頸部のガンである。

死ぬ前一ヶ月、内閣の弾劾を天皇に訴える案が議会上程された。これは当時の日本の議会組織では最も過激なそして重要な行事だったのである。鉄腸は大学病院で病床に横臥していたが、むっくりとはねおき、車にのって、かううじて登院して、反政府の一票を投じたので、その氣力におどろかない者はなかった。日本の議会史の上で、ひとつの逸話となっている。

3 「啞の旅行」

前にのべたのでわかるとおり、末広鉄腸はホセ・リサルと関係ある書物をみんなで五種類かいているわけになる。それを逐次に説明しよう。

まず二つの旅行記であるが「啞の旅行」の啞とは鉄腸が歐洲語を聞きとることも、話すこともできないのを言ったので、フィリピンでは、“deaf and mute”と訳されているのは適當である。*

* “Risal in Japan”

これは前編と後編と二巻にわかれている。

「鴻雪録」の鴻とは *stork* にいた大鳥のことである。その鴻という鳥は遠地にわたって行って故郷にかえるとき、又くる目じるしに泥や雪の上へ足跡をのこすが、雪はきえ、泥はあらわれて、再来したとき、何ものこっておらぬというので、支那では昔から旅行の思い出を、こう呼ぶのである。

ところで、同じ旅行記でも「啞の旅行」の方はいちじるしく陽気で滑稽的なのに、「鴻雪録」の方は沈痛で悲劇的なのが、際立つ対照をなしている。

一八〇二年、封建の全盛期に一九という滑稽作家があり「ピクウィック藤栗毛」という旅行記を出版した。これが非常に日本人の好みにかない、おなじような旅行記が後からたくさん出て、その流行は明治の革命をへて、新しい文学がおこってもやまなかった。早くいうと Charles Dickens の “Pickwick Papers” に似ている。鉄腸のこの旅行記はそのタイプをまねた最後の有名な作といえるであろう。

まず鉄腸がアメリカゆきのベルジック号にのりこんだが、船の作法も、西洋式の生活もさっぱりわからない。誰れか日本人乗客がいないか、おれば通弁をしてもらいたいと思ってさがしまわっていると、幸運にもひとり見つかった。やれうれしやと思って話しかけたが、彼は、ふしぎそうな顔をして、なにか答える。

「先生、僕には英語はわからんのだ」というと、この男は、おぼつかない日本語で、

「私マニラ、日本人ありません」

と言ってすぎ去った。

これが切っかけで、このマニラ紳士はこの日本人のために、通弁をしてやることになる。

普通からいうと、一ヶ月半の東京滞在で世界一にむつかしい日本語を、ともかくも役立つだけに習得し得たなどということば、とうてい想像もつかない。しかし、この本をよむと、このマニラ紳士は、通弁のできるだけに、日本語を実際はなしていることが確証せられる。この一事だけでもリサール博士が言語学者として如何に特殊な天才であったかがわかる。

ある西洋人は、日本が開国したとき、風俗習慣のあまりにも大差あることを、たとえ突然月の世界に投げ出されていても、これほどの驚異は感じないだろうと言った。

封建制度が崩壊してから十年か二十年しかたっていない。その一八八八年ごろの日本人には極端にいえば毎食のナイフやフォークの使い方もわからず、W.C.の扉の開閉もわからない。そこで鉄腸は無細工と滑稽百出の醜体を演ずるのを、マニラ紳士は、母親が幼児をさとすように、一々懇切に教えている。

たとえば、こういう一節がある。アメリカからイギリスにわたる船中で、ひとりの目立つほど華美な女性に話しかければ、そのころは鉄腸も英語がすこしずつ分ってきたから、一しよに腕を組んで散歩していると、今まで愛想よく応待してくれていた船客たちが、急にみんなそっぽを向いて疎遠にするし、非常に親切的な宣教師まで、無愛想になった。そのわけをきくと例のマニラ紳士は皮肉をおびた微笑をもって、

「あなたは太そう愉快げに、あの女性とデッキ散歩をしていましたね。それで軽蔑されたのです」

「だってみんなレディと手をつないでいるいたり、おどったりしているではありませんか。だから僕の軽蔑される理由がない」

「彼女はレディではなく。Poor Womanなのです」

「Poor woman ならなおのこと、親切にしてやるべき義務があります」

「いや、Poor woman とはそういう意味ではない。日本という女郎と同じものです」

だから、一しよに散歩するのは気をつけた方がいいと教えてくれた。鉄腸は美しい女性の知己ができたと大得意になっていたのだが、考えてみると、はじめ彼女はすれちがいざまに、彼の手をつねったのがきっかけで口をききだしたのだから、「やはり普通の女性でなかったのだ」と、合点がいった。そこでマニラ紳士にたのんで、牧師その他に弁解してもらった。

これは東洋人がしばしば経験することで、私もアメリカ船にのって同じような思い出をもつ。

この書は別に大文学でないから英訳せられるのぞみがない。しかし、毎章にこのマニラ紳士の親切さ、性格の善良さがあらわれている。他日、日本語に達者なフィリッピンの研究家がよむなら、どのリサール伝にもない幾多のエピソードにぶつかるだろう。そして、リサールが心にかけたのは、同国人ばかりではなかった。外国人とくに同じ東洋人にたいしては、どういう態度をとったかを知ることが出来るだろう。

4 革命家として紹介す

鉄腸のこの「啞の旅行」は、その折々の感興を目記がわりに書き綴った旅行通信だが、ホセ・リサールの人物をはじめて日本に紹介した書物だとしても、只「マニラ紳士」とのみしるして、その名前は一度もかいていない。

これはおそらく鉄腸がはじめリサールを尋常一様の人物と考えて、とくに名前をしるす必要をみとめなかったのだ。ところが一しよに太平洋とアメリカ大陸と大西洋を同じ船と汽車で横断して、毎日厄介づかいをかけているうちに、いつしかその人がらも分り、且つ又経歴をきいて、ひどく敬服した。そこで欧羅巴滞在の思い出をかけた「鴻雪録」においては、こう言っている。

「十二月一日早天に起き出ず。……別れを寓楼の人に告げ、九時半馬車にのぼり、議事丘を下るに際し、親友リサール氏の歩いて余の寓に來るに出会い、呼んで車にのる。リサール氏はマニラ人なり。年令わずかに二十七、八なるが、すでに七か国の語に通ぜり。その本国のスペインの支配の下に立つて圧制を受け、かつローマ旧教のため惨害をこうむるを怒り、前年スペイン語を以て書を著わし、スペインの植民政略とローマ旧教とを攻撃したるを以て、太守は氏を捕え

て獄にし、下宗教の犯罪人となし、これを死におかんとす。氏は身を脱して、わが国に走り、止まる一か月半にして、ほぼ日本語に通ず。余は始めてベルジック号の船中にて氏と相知り、同行してアメリカを経過し、イギリスに来たり、その後も絶えず氏に往来せり。氏の人となり磊落にして小節にかかわらず、芸能多し。蠟細工にいたりては、ことにその精巧をきわむ。聞く、スペイン政府は氏を以て国事犯なりと布告し、氏の著作を蔵する者は、これを同類と見なして入獄を命ずるといふ」

これだけの簡単な文章である。しかし、ホセ・リサールの名前、およびその革命家としての経歴を始めて日本につたえたものとして、重大な意味をもつ文献である。

この文字でつたえられたリサールは、もう Pickwick Papers 式な滑稽人物ではない。鉄腸は旅行中の数々の失敗談をかたるには滑稽の筆を弄する方がいいと思ったのだが、彼自身がもともと志士で政論家だから、ヨーロッパの時事を語るには、俄然シリアスな文章に調子をかえたのだ。したがってリサールに対する記述が悲憤慷慨の調をおびてくるのも当然である。

5 「南海の大波瀾」

末広鉄腸がリサールから受けた印象は非常に深刻で、そして彼の経歴や境涯にたいし、多大の興味をうごかした。彼は日本で初めて議会がひらけ、自分は代議士にえらばれて政戦の忙しい中に筆をとり、「南洋の大波瀾」という小説をかいた。この主人公は多加山峻という日本名をおびたフィリピン人になっているが、リサールをモデルとしたことは、序文をみれば明瞭である。

「余の前年、西洋に遊ぶや、マニラの一紳士と相知る。マニラは南洋中にありて、スペインの植民地なるフィリピン群島の一なるルソンの首府なり。この紳士はひそかに群島の独立をはかりて成らず、捕われて獄に下らんとし、脱して海外に走れり。余がためにスペイン政府植民政略の、その当を失い、群島人民の激憤するありさまを説き、人をして悲憤慷慨せしむ。一日、紳士の寓において一女子の写真をみる。明眸皓齒、楚楚として人を動かすの状あり。而してその容貌は宛然たる日本人なり。これを問えば慘然としていわく、

『わが婚儀を約せしマニラの貴女なり。余は万死を出でて国を脱せしを以て、この情人を携帯する能わざりし』と。数月のち紳士に会い、君が故郷にある情人の恙なきやを問う。紳士いわく『頃日、音信を得たり。余の海外に漂泊し、その帰期なきを以て、遂に家をすてて尼寺に入れり』と説き終り、自ら悲哀に堪えざるものの如し。余もこれを聞いて、ために袂をうるおし、ひそかに思えらく、この紳士と貴女は多情なる才子の筆になる小説中の人物の如しと。頃日たまたま感ずる所あつて一の政事小説を著わさんとし、遂にこの紳士貴女の事実を敷演して、これを南洋の大波瀾と名づく』

この序文にリサールの名は見えぬが、マニラの紳士というのが彼をさすものであることは、前の著作の旅行記によって、疑う余地がない。そして彼から見せてもらった若き婦人の写真というのは、リサールの従妹で、初恋人で、そして許婚の仲のレオノラのものであつたにちがいない。

すなわち、明治二十四年には、日本において早くもリサールを主人公とした小説が出ていたので、多分このころは本国フィリピンにおいても、そのような小説は、おそらくまだ刊行せられていなかったであらう。

鉄腸の著作は、その旅行記もこの小説も何版かを出すほど歓迎せられたが、今日からみると、粗硬なので、この小説も

もとり英訳せられる望みはない。そこでその梗概を語っておくであろう。――

多加山峻（名は日本人でじっさいはリサル）は、マニラ人で高い教育も受け、資産もあるが、学者たることを理想として政治などに関心をもたぬ青年であった。

しかしスペイン総督の虐政があまり甚しいので、ついにひそかに同志とともにフィリッピンの独立を企画するにいたった。

ある日、彼はマニラ街上で騎乗のスペイン人から法外の甚しい侮辱をうけたので、それを追っかけて郊外に出ると、マニラ特有のスコールにあり、道ばたの廃屋で雨やどりをしていた。ここで落雷のため気絶してたおれている滝川清子（レオノラにあたる）という若い女性を救う。彼女は野外散歩に出ていたところ、かねて彼女に思いをこがしているスペイン牢獄の監守長讓治（George）に出あい、あやうく暴行をうけそうになったのを、やっとここまで逃げてきて、雷の奇禍にあったのだ。それを救われて彼女は高山を慕う気もちになる。（身の危難をすくわれた女性が、救い主を恋慕するというプロットは、日本の封建時代の文学には非常に多い）この清子の父はマニラの豪商である。その点ではノリ・メ・タンヘレの Captain Tiago とどこやら似ている。しかし非常にちがう点は、チャゴは狡猾にスペインの有力者と交渉して商利を得ているが、清子の父は商人ながら、ひそかに独立を計画している志士である。清子を助けた因縁で多加山は、この家に入りし、二人は心をうちあけ合って、独立の大事を相談しあうようになる。

二人の目標は同じながら、それを達成する手段になると意見がちがった。欧米の事情に明るい多加山は、あくまでもアメリカやヨーロッパの文明国の助けをかりようと考えている。これに反し、滝川は東洋諸国、特に日本の力をたよりにして独立しようと考えている。

滝川の方は世故たけているので、考えが漸進的で堅実だが、多加山は若いので兵をあげることを急ぎ、言動がややもすれば過激にわたろうとする。二人の意見がくいちがうので、一時は仲が疎遠になったことさえもある。

一夜、滝川家に怪盗がおしいて、主人に致命傷をおわせ、家につたわる宝刀をぬすんでいったので、滝川は瀕死の枕元に多加山をよび、自分の漸進主義はまちがっていたとわびて、どうか清子と結婚して、独立の一念をつらぬいてくれと頼んで、そして息がきれた。

多加山も、仔細にみると欧米は結局はあてにできないので、それに依頼する計画はあきらめ、滝川老人の考え通り、日本に援助を乞うて独立する方針にきめ、用心ぶかい自重主義をとる。

そのため陰謀の本部はわざと滝川商会のなかにおき、清子に店を支配させて、カムフラージュしたから、もとの仲間が多加山は同志を裏ぎった変節者だと怒って、なかには彼を暗殺しようとする者も出てくるに至った。

折からフィリピン全体に農作物の不作がおこり、それにもかかわらず、スペイン政府はマニラ煙草の専売法を強行したので、全島民のあいだに不平が高まった。

多加山は、この機をのがさず、島民の反逆的感情を統一して、もりあげるため、香港で秘密文書を印刷させて、全島にばらまいた。警察は血まなこになってその犯人をさがしても、一こうに見つからない。

清子に横恋慕している讓治の手下に九蔵くざうというものがいて、滝川商会ではたらいっている関係上、彼は多加山の計画を知り、讓二に密告したから、ただちに警察につたえて、多くの警官に商会をとりまかせるが、用意してあった火薬に火を点じたため、家もろともに一さいの機密書類は煙になって吹っ飛んでしまった。

多加山は逃げようとして捕えられ、清子と一しよに牢獄になげこまれる。しかし、讓治は職権をもって清子だけを釈

放したので、清子は牢獄にたべ物の差入れ物をするが、讓治は途中でおさえて与えぬので、多加山は日ましに衰弱するばかりである。

讓治は清子にむかい、多加山の命は自分の一手で左右できる。もし救いたいのなら自分と結婚せよと迫るのである。

このとき、大地震がおこり、これに乗じて多加山は牢獄をのがれて、しばらく清子のもとにかくまわれたが、マニラは安全でないので、二人はともに中国に向って逃げようという計画をたてる。

ひとまずカビテまでゆき、荒れくるう風雨の中に舟を出して、鰐魚の危険や、警察の追跡をのがれて、リングエンに到着し、もと多加山家であつてた乳母の家があるので、そこにひそんで、アモイゆきの便船を待った。

しかし、警察から人相書きや、多加山をとどけたものにたいする懸賞金の布令がまわっているので、慥に目のくらんだ乳母の夫が訴え出ようとする。乳母はやむなく夫をころし、三人小舟にのって逃げ出した時、龍巻きがおこって、投げ出され、はなればなれになってしまった。

多加山は通りかかったイギリスの定期船に救われたので、そのままロンドンにつれてゆかれる。

ロンドンでは同じくマニラから亡命してきている青木との間に親交がむすばれる。ヨーロッパの事情に詳しい青木は、イギリスとドイツが虎視眈々としてフィリッピンをねらっているということを話してきかせたので、独立の兵をあげる時に、それらの強国の干渉介入をうけては大変だと警戒して、いよいよ、たよりにするのは日本以外にないと考え。しかし青木はいった。

「いや、その日本も、近ごろは西洋の文明の上っつらばかりを模倣している有様なので、一こうたよりにならない」これをきいて、多加山は非常に落胆する。ともあれフィリッピンの現状とスペインの虐政を世界に訴えることが何よ

りも必要だと考え『近世マニラ政略史』という書物をあらわして、フィリピンが独立しなくてはならない所以を論ずると、この書物は非常に有名になり、多加山は、ヨーロッパ各国の上流階級や知識階級の間に多くの知己を得たが、そのために身の危険は一そう加わって来ずにはすまぬ。

一夜、清子が多加山の夢にあらわれ、彼の身に危険のせまっていることを告げる。さめて、ふしぎな夢をみたものだと思っていると、思いかげずも、滝川家の傭人だった九蔵がたずねてきて知らせた。

「清子様はロンドンまでくる途中、マドリードで急病にかかられた。あなたは私とすぐ一しよにきて下さい」

その証拠として、清子の指輪と写真とを示すので、疑わずに九蔵とともに出発すると、途中で麻酔薬をかがされて昏睡におちいり、そのままスペイン国内につれこまれる。しかしはからずも、列車が衝突して九蔵は即死し、彼を使喚していた讓治も一しよの汽車にのって大怪我をするのだが、昏睡して何も知らなかった多加山がかえって助かり、バリに引き上げた。すると、意外なことには、じっさいの清子はバリにきていて、そこであの恐ろしい龍巻で別れ別れになって以来、はじめて二人は再会する。

同志青木がバリまで迎えにきて言った。フィリッピンの形勢はいまにも爆発しそうであると。また清子もいった。日本の同情者三百人が横兵で待っている。

折からトルコ問題が紛糾し、ヨーロッパ諸国は東洋のことに手を出す余地がない。今こそ独立の好機として、多加山は兵をあげる準備にかかった。

そのころ多加山は、ブリテッシュ・ミュージアムにいつてしらべ物をしていて、ここにあつてある日本刀のなかに、滝川家から盗み出されたものがあるのをみつけ、イギリス警察に訴えて調査してもらうと、讓治が恋のかなわぬ恨みか

ら滝川の主人を殺して、その時に盗みだしたものであることが判明する。これが機縁で古文書などしらべて、多加山は、自分はあるいは昔に日本からフィリッピンに移住した者の子孫ではないかと考えたした。

いよいよ機が熟して、多加山は香港に同志をあつめて、マニラを急襲したが、勇敢なる日本人の援助があつて、苦もなくこれを占領し、ここに新政府が樹立せられて、多加山は都督の位置につき、全フィリッピンを平定して、スペイン勢力を駆逐することに成功した。その上で清子を迎えて結婚する。

「南洋の大波瀾」の梗概は以上のものであるが、末広鉄腸は日本人読者をよろこばすために、さらに付け加えている。多加山はいろいろ調査の結果、果して高山右近の子孫であることが判明した。そこで、彼の統治に帰したフィリッピンは、日本の保護を仰ぐことを決意し、島民の賛成を得て日本と同盟した。スペインはフィリッピン討伐のため、兵を送ろうとしたが、背後に日本がひかえているので、遠征軍の派遣を中止し、フィリッピンと日本は、行末永く繁栄したというのである。

6 高山右近

この梗概につけて語っておかねばならぬことがある。第一は、ホセ・リサルをモデルとしながら、なぜそれに多加山峻の名を与え、高山右近の末孫としたか。

この高山右近のことはザイデ教授の“*Philippine, Political and Cultural History*”にも記述してある。(vol. I, P. 292, 300) 日本の戦国当時の支配者の太閤秀吉から「キリスト教をすてよ。でなければ大名をやめよ」の二者択一を言い渡され、甘んじて大名の栄華をすてて、キリスト教を奉じ、そのため一六一五年にスペインに追放せられた。彼の名は早

くからクリスチャン大名として海外にも伝わっていたので、彼を喜び迎えたマニラのフィリッピン総督は、政治顧問として彼を待遇し、高い給金を与えようとしたのを、「いや、自分は日本以外の他国の君主に臣従する気もちはもたない」と言って、ことわって清貧な生活に甘んじたので、いよいよ尊敬を高めた。しかし、マニラの氣候が合わず半年ほどで亡くなって、みんなに惜しまれた。

彼は武將として攻城の術にすぐれていたばかりでなく、茶道の名人であり、又文雅の教養をゆたかにもっていたので、日本人からも愛され、西洋の宣教師からも重んぜられて、西洋諸国でも、早くから小説や劇にかかっている。マニラでは彼の住んだ旧城内の寺の室に、さきほどの戦争前まで標札をうって、彼の記憶を保存してあったが、戦争中に無知な日本軍が破壊したときいている。

してみれば、この高山右近 (Ucondono Takayama) の末孫がリサールの身代りとして、この小説の主人公となっている理由がうなずけるであらう。

ところでこの小説は、陰謀が発覚して家を焼いて、文書を埋滅し、カヴィテから水上をリンガエンに逃げてゆく話をはじめとして、ノリ・メ・タン・ヘレに酷似した筋が多い。鉄腸はそれを読んでいたとは思えない。しかし彼の小説が刊行せられた一八九一年、果してノリの英訳ができていたかどうか。この点をフィリッピンの研究家に確かめてもらいたい。もしそのころ、すでに英訳が出ていたのなら、鉄腸がそれをよみ、そのプロットを借りもちいたことに不思議はないが、どうも英訳はなかったようだ。アメリカで“Eagle's Flight”という題の英訳が出たのは、それから十年もたった後である。とすると、鉄腸はその小説の梗概を詳細にリサールから話してきかされたものと考えざるを得ぬ。

なお、さきの梗概で、多加山が列車転覆ののちバリにゆくと、そこで夢にみた清子と、ゆくりなくもめぐりあうと書いて

だが、リンガエンの海上で龍巻にのまれて、わかれわかれになった清子がどうしてバリにきていたのか、あまりに唐突である。それをおぎなうためにかいたのが「嵐のなごり」という小説である。鉄腸はこの二作の小説の不備をなおし、さらに書き足して、これを合わせたのが「大海原」に外ならない。

日清戦争の前後から、鉄腸は健康を害したが、病軀をむちうって「戦後の日本」という小説をかいた。その後半は自分で筆をとる気力がなく、口述して他人に代筆させたのである。しかもこの作の結構はフィリッピンの独立戦と、それに对ける日本志士の活動が主になっている。ここにはリサールの名は出てこない。しかし鉄腸の死にいたるまで、頑強にもちつづけたのが、フィリッピンの独立のことであつたというのは、リサールから受けたインスピレーションが如何に強かつたかを語るものである。この書は一八九六年、リサールの刑死のわずかに数ヶ月前に刊行せられたのだ。

リサールがバグンバヤンの広場で銃殺刑をうけた（明治二十九年十二月三十日）という記事は、日本の三つの新聞（朝日、国民、日本）にもあらわれている。通信の幼稚な時代だから、翌年の一月十日ごろから、前後して出ているが、香港新聞にのつた電報から訳したので、直接の通信では、もちろん、無い。

鉄腸がそのときまで生きていたら、大いにショックを感じたであらう。だが、彼はすでに墓場の人だったので、只おせいさんがひとり、ひそかに胸の裂ける思いをした以外は、すべての日本人がリサールの名を全く無関心でよみすごしたことであらう。

7 日本義勇兵

リサールの刑死後、フィリッピンには待ちかまえたようにして、革命がおこった。アメリカの後援を得て、スペインの

統治には終止符をうって、アギナルドのもとに共和国を建設したが、今度はアメリカの裏切りと偽瞞によって独立をうばわれ、今までの対スペインへの反逆が、対アメリカへの反逆とかわった。

そのとき、末広鉄腸が、その小説で空想したのが、はからずも予言のようになり、白人に失望したフィリッピン人は、日本の援助を乞う方針をきめ、マリヤノ・ボンセ (Mariano Ponce) その他が使節として来朝した。

マリヤノ・ボンセは、後に首相となって暗殺された大義毅や、有名な記者の志賀重昂の助けをかりて、東京倶楽部で長講一席、フィリッピンの実情を訴えた。これを有力新聞が一せいに報道したので、日本は初めて友邦フィリッピンが危急存亡の瀬戸ぎわにあることを知り、同情と義憤の念に燃え立った。スペインとアメリカ——ことにアメリカはこの氣勢におどろき、外務省につよく抗議したので、日本政府筋は、表面フィリッピンに同情することはひかえざるを得なかった。日露戦争の足音が日一日と近づいてくる。これにはどうしてもアメリカの好意を日本につなぎとめておく必要があつて、アメリカの機嫌を損ずることは絶体に避けねばならなかった。

しかし、民間志士はそんな国際的顧慮に頓着なく、義勇軍として参加を決意し、フィリッピン独立軍が何より熱望するのは武器なので、これが入手を陸軍参謀本部に交渉した。なかなか承知はせぬだろうと思つていたのに、参謀総長の川上操六大将は、日本陸軍に類のない卓識の人だったので、

「君らが義勇軍としておもむいても強大アメリカに反抗して、フィリッピンが独立を完成することは困難だろう。しかし、国家の生命は長久だから、五十年、百年さきのことを考え、フィリッピン人の信頼を日本に結びつけておくことは大切なことだ」

と云つて、外務大臣青木周蔵の強硬な反対をふりきり、武器をはらい下げてくれた。これを満載して日本を出港したのが

「布引丸」という船で、台湾沖までいって颱風のため沈没し、独立軍を落胆させた話は、フィリッピンでも多くの史書に記載されている。独立軍はアメリカを相手に、意外によく戦うたのに全世界は驚歎した。日本では国民的英雄の西郷南洲が明治十年に死なないで、フィリッピンにわたり、アギナルドの維幕にあって軍の指揮を助けているのだという評判が高かった。

8 評論・詩・伝記

以上のような歴史的背景からさまざまな文学作品があらわれた。

(1) 「フィリッピンの小説家リサル」(明治三二年)

六月の「太陽」という雑誌にのった無署名の論文である。ヨーロッパの文学批評家がリサルを「フィリッピンのトルストイ」と言っていると紹介し、文末に「The Last Farewell」の一節を英訳のままでのせている。

(2) 「南洋の風雲」(明治三三年)

マリヤノ・ボンセが詳細にフィリッピンの独立事情を訴えた“*Question Filipina, una exposition historico critica de hechos relativos A' La Guerra de la Independencia*”を日本訳したもので、これは早くからフィリッピンの愛書家に国宝として珍重せられている本である。この中にリサル伝があり、彼の生涯が正確にくわしく日本に紹介せられたのは、これが初めてである。

(3) 「あぎなると」(上下) 山田美妙著(明治三十五年)

山田美妙は有名な小説家でフィリッピン事情およびリサルの紹介に、多大の役割を果たした人として、忘れてはならな

い。これはアギナルドの伝記だが、その上巻の大半はリサールの伝記をあつかっており、「南洋の頼山陽（ういきんよう）」とよんでいる。頼山陽は維新の革命の思想的先駆者となった文豪なので、日本人にはこの比較は了解しやすかった。この書は非常に文学的にできているので、読者を動かすこと甚しく、批評家千葉亀雄、詩人伊良子清白、有名なアルビニストの小島鳥水、詩人の河井醉茗などが、彼等のよった雑誌「文庫」誌上に筆をそろえてリサールをたたえた所見を発表している。

(4) 「武俠の日本」押川春浪著（明治三十五年）

アギナルドの独立軍にたいし、日本の英雄西郷南洲が作戦指導をしているという物語で、全くの架空小説ながら全日本の少年を欣舞雀躍させた。私自身も一九〇七年十二才のとき、懸賞文の賞品に春浪の小説「新日本島」というのをもらって、はじめてフィリッピン（フィリピン）の独立戦争の事情を知り、今日まで関心をもちつづけてきた。これらは前後六冊つづきの小説なので、中にもちろんリサールの名も何回か出てくる。アギナルド將軍がこれらの小説のあることをつたえきき、懇望しておるときいたので、私は戦時中たずさえていつて贈呈したことがある。

(5) 「ノリ・メ・タン・ヘレを読む」河上 清（明治三十五年）

Noli Me Tangere は一九〇〇年“An Eagle's Flight”という題でアメリカで英訳せられた。それを手に入れてよんだ批評をアメリカから「万朝報」におくったのである。この小説にたいする日本人としての最初の長文批評である。

(6) 「日本国歌」平木白星著（明治三十六年）

愛国的な詩をあつめたのだが、この中に「アギナルドに与ふ」の一篇があり、傑作として青年の間に愛誦せられた。

(7) 「血の涙」山田美妙訳（明治三十六年）

Noli Me Tangere の abridge 訳。しかし、この小説の最初の日本語で、今日非常に稀書となり、容易に入手できな

い。但し訳はあまりよくない。吾々もはじめこれでよんだので、ノリを実質以下に低く評価した。私がかいた最初の論文（拙著「南の真珠」の中にあり）など、その弊におちいつている。

(8) 比律賓跋涉 土屋 元作（大正五年）

紀行文だが、中にリサル伝もあり、ことに巻中に近松塀左衛門作「さんちやご城牢屋の段」という浄瑠璃ののっているのは最も珍とするに足る。なぜならこれはリサルが牢中における最後の日、刑場におもむく前夜に取材したものである。

(9) ホセ・リサル伝 花野 富蔵著（昭和十七年）

(10) ホセ・リサル 毛利八十太郎著（昭和十七年）

戦争の初まった翌年に、この両著が前後して出た。それまで、断片的にはリサル伝はかなり沢山あらわれているが、単行本はこのふたつが始めてである。

(11) 南の真珠 木村 毅著（昭和十七年）

私のマニラ従軍記。この中の一篇「ホセリサルの恋人」は、「おせいさん」の存在を日本人に知らせた最初の文献である。

(12) 黎明を待つ 毛利八十太郎訳（昭和十八年）

ノリ・メ・タンヘレの英訳からの全訳。読過して、大へんよく訳されていると思った。

(13) 布引丸 木村 毅

フィリピン独立軍をたすけた日本側の事歴を詳細にしらべた小説。これより前「アギナルド独立軍」という短篇をか

いて、この方は“Aguinald independent Army”として英訳され、小冊子になっている。これはアギナルド將軍も読んだ。

以上が終戦までに現われたリサール関係の主なる文芸作品である。リサール百年記念祭（昭和三十六年）にあたって次の二書が刊行せられた。

(13) ホセリサールと日本 木村 毅編（昭和三十六年）

柳田泉との合著である。

(14) 日本におけるリサール 木村 毅訳（昭和三十六年）

これは Lanuza, Zaide 共著の“Rizal in Japan”を翻訳したものである。

リサール百年記念の国際大会は、昭和三十六年の十二月三日から八日まで五日間にわたってマニラで開かれ、日本代表としては戦時中、ロハス大統領を救ったので名声をあげた神保信彦元大佐と私とふたりが招かれた。柳田泉氏も招待をうけたが、健康がすぐれぬので辞退した。私は、この「ホセ・リサールと日本文学」を、神保氏は「リサールと鉄腸」を発表した。それは共に、あちらの刊行物に掲げられている。すなわち左の通りである。

(15) Jose Rizal and the gifted Japanese man of letters, by Ki Kimura. (Mirror, the Saturday Magagin, January 27, 1962)

(16) Rizal and Tetcho, by Col. N. Jimbo (Historical Bulletin, o. 2, June 1962)

(17) Proceedings of The International Congress on Rizal, December, 4-8, 1961

リサール国際大会の公式記録で神保氏と私のペーパーは世界各国の他の代表のと共にこれにのっている。